
ヒーダマ

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ビーダマ

【ノート】
N1008Q

【作者名】
源雪風

【あらすじ】
ふしぎなビーだまをてにいれたしょうねんのかつとう

僕の宝物は透明なビー玉だ。

でもただのビー玉じゃない。

握ると空を飛べるすごいやつだ。

でもこのビー玉を返さないといけない。

手に入れたいきさつがちよっぴり不安だから。

散歩していて偶然廃遊園地を見つけた。

そこで見つけた機械人形の左目にあつたのを取ってきた。

どうしてもビー玉が欲しくてたまらなかつた。

ビー玉にはものすごい力があつた。

でも左目を失つた機械人形のことを考えると、かわいそうで罪悪感に襲われる。

機械なのだから目を失つても悲しむことなどないのに。

ビー玉の特別な力が機械人形にとって大切なものだったら、返さないといけない。

それに機械人形の持ち主に見つかったら大変だ。

すごい力のあるビー玉を持っているくらいだから、機械人形の持ち主はただものじゃないかもしれない。

怒って呪いをかけてくるかもしれない。

夢に左目のない機械人形が出てくることもある。

人形は何をするわけでもなく、佇んでいる。

やっぱり返さないといけない。

意を決してビー玉を返しに行くことにした。

雨の中、傘をさしてとぼとぼ歩く。

機械人形の元へすぐ着いてしまった。

でもビー玉を返せなかつた。

人形をかわいそうだと思っていたくせに、ビー玉を持っていたという気持ちで勝ってしまつて動けなくなった。気付いたら機械人形に背を向けて走り出していた。傘は置いてきてしまった。びしょぬれになった。

駄菓子屋で空を飛べるビー玉とそっくりのやつが売っていた。それを買つた。

何も返さないよりは、偽物でもいいから返そうとずるいことを考えた。

ビー玉を二つポケットに入れて、機械人形の元へと向かう。返す前にどっちが本物が確かめる。

本物は握れば体が浮く。

でも、どっちを握つても体が浮くことは無かつた。

悪い心を持ったから、力が失われてしまったのかもしれない。

もうどっちが本物だったか分からない。

とりあえず一つを左目にはめておいた。

もう一つはまだ持っている。

でも、もう空は飛べない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1008q/>

ビーダマ

2011年1月16日02時23分発行